

ヒスパニックのアメリカ「同化」

— 民族・世代間婚を指標として⁽¹⁾ —

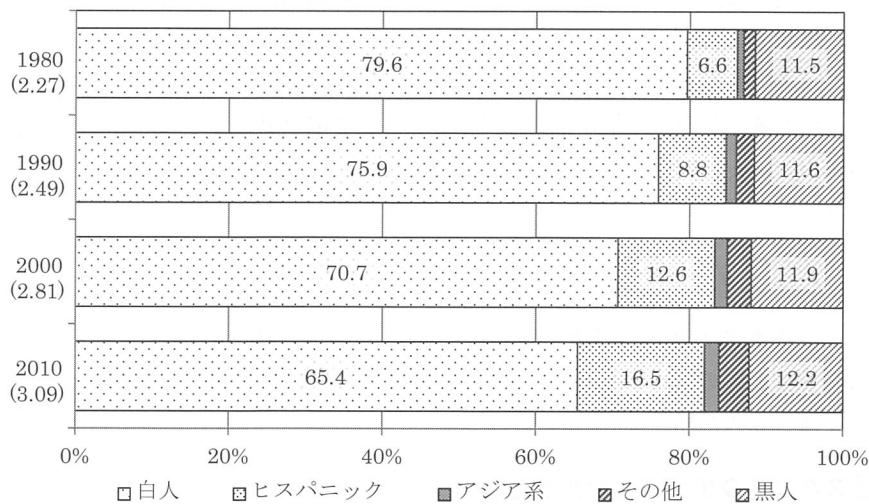
川野 幸男

1. はじめに アメリカの人口構成の変化と同化理論

アメリカにとって20世紀最大の問題が黒人と白人の境界線（カラーライン）であったとするなら、21世紀最大の問題はこの人種境界線が存在し続けるのかどうか、そしてどのグループがどちらの側に属することになるかである（Lee and Bean 2010: 15）⁽²⁾。

図1が示すように、1980年以降の30年間にヒスパニック⁽³⁾ およびアジア系住民が急増し、いっぽう非ヒスパニック白人⁽⁴⁾ は8割から6割まで減少し、黒人の人口比は不変であった。「21世紀最大」は言い過ぎかもしれないが、いずれ白人が総人口の過半数を下回る見込みのなかで社会の主流・非主流層の境界と人種境界線がどうなるかはアメリカにとって非常に大きな問題である。

図1 アメリカの人種・民族構成の推移（1980-2010）



人種・民族構成：Census PUMS 1980, 1990, 2000, およびACS 2010（加重推計）。（）内は総人口、億人：Statistical Abstract of the United States 2012。

人種境界線の変動理論は三つに分類できる。第一に人種の境界線は白人対「非白人」から黒人対「非黒人」に移動するという説（新同化論）である。この説によればヒスパニック系とアジア系のアメリカ人は過去のドイツ、イタリア、アイルランド等⁽⁵⁾のヨーロッパ系移民とおよそ同

様に、世代を経るにつれて「白人」と見なされるようになり (Yancey 2003)、やがて主流層に「同化」してゆく (Alba and Nee 2003; Alba 2009; Lee and Bean 2010)。しかしいっぽうで黒人と「非黒人」との間の溝は埋まらないとする。図1からも、白人人口の相対的減少をヒスパニックやアジア系が埋め合わせれば、「非黒人」が人口の9割近くを占める状態が続くという構図が見える。

第二の理論は既存の白人・非白人の境界線が存続すると考える非同化論である。ヨーロッパ系移民の場合、新規移民の流入が大恐慌期以降に大幅に減少して母国との接触の機会が減少し、結果的に同化が早まったといわれている。しかし運輸・情報インフラが発達している現在ではそのような断絶はおこりえない。とくにヒスパニック系の場合には地理的近さもあり、母国との継続的接触は以前のヨーロッパ系よりはるかに容易になっている。結果的に、新来移民とその家族は主流層との距離を縮小させないとされる。これは対白人「非同化」論であり、その反面では特定マイノリティ層への「同化」を示唆している。その「同化」の方向性が都市下層などに向く場合には、ポルテスらによって提唱された分節的同化理論⁽⁶⁾の文脈で「下降的」同化と呼ばれることもある (鈴木2006; 村田2007)。

このような理論を背景に、チャン＝リヒターは一連の民族間結婚の研究 (Qian 1997; Qian and Lichter 2001等) において、ヒスパニック系アメリカ住民の同化が「下降的」になったと主張した。ただし、そもそもこの分節的同化理論は同一民族でもその内部に多様な同化形態があると考え (梶田2005; Xie and Greenman 2011) ので、チャン＝リヒターのようにヒスパニック全体に一つの同化形態を適用することは、ポルテスらの理論の正確な応用とはいえない。とはいえ、本論ではこの理論面の齟齬はひとまず脇に置いて、チャン＝リヒターの諸研究の実証面での検証をおこなう。したがって本研究でもヒスパニックという枠を用いるが、それはある意味便宜的な枠組みである。分類自体の適切性を問う議論は、特定の出身国たとえばメキシコ出身者に限定した研究 (たとえば川野 2011; Qian et. al. 2012等) をも踏まえたうえで別におこなうのが適切だろう。

第三に、白人でも黒人でもないグループの一部がいわば「名誉白人」となって複数の境界線が発生すると考える多元化論がある。多元化論では教育水準の高い一部のヒスパニックやアジア系が「名誉白人」となる人種の「三極化」がおこること考える (Bonilla-Silva 2004)。多元化論は非同化論の一種と考えられるが、これらの新興マイノリティ集団が白人とも黒人とも「同化」しないと考えるところが異なる。

2. ヒスパニックの民族・世代間婚⁽⁷⁾

本論では、今後アメリカの人口動態において最大の鍵となるヒスパニックの「同化」を民族・世代間婚の観点から分析する。民族間の結婚は同化プロセスの最終段階と呼ばれ (Gordon 1964)、集団間の社会的距離の指標として数多くの研究に用いられてきた。異民族の個人が出会って結婚に至るには個別特殊な事情も大きく影響するため、それが民族間統合の指標として適切かどうかの議論もある (Song 2009)。とはいえ、間接的・象徴的には有意義な指標である

う。というのも個人間の親密度の究極の形態である家族形成を氷山の一角とすれば、結婚の背後には広く緩やかな交友関係が存在し、家族や親族のなかに異民族の配偶者を受容する素地が形成されているはずだからである。つまり民族間結婚は民族間の境界を掘り崩す現象として、カラーラインを研究するための格好の材料なのである。

チャン＝リヒターは「1990年代、婚姻可能年齢にある同族の人口が増加したことが、ヒスパニック系アメリカ人の文化的伝統を復活させて同族間結婚を促進した」(Qian and Lichter 2007: 90) と述べている。彼らの主張が正しいとすれば、人種境界線は白人・非白人の間にあり、白人とヒスパニックとの社会的距離は乖離したことになる。アメリカでは1960年代以降ヒスパニック人口が増大し白人との外婚も増大してきた。ところが90年代になってこの傾向が逆転したことが、チャン＝リヒターらの研究によって明らかになった (Qian and Lichter 2007; Lichter et.al.2007)。彼らの仮説によれば、この転換は大規模なヒスパニック系移民が継続した結果、「ヒスパニック系アメリカ人の文化的伝統を強化して同族間結婚を促進」(Qian and Lichter 2007: 90) するとともに「ヒスパニックと白人との間の社会的距離が拡大した」(Lichter et. al. 2007: 762) ことによるものであった。これらの解釈から、彼らは分節的同化が生じつつあるものと考え、データも概ねこれを支持すると結論したのである。彼らがヒスパニックー白人婚の相対的減少を「発見」したことは、のちに「画期的 (Groundbreaking)」(Morgan 2013) と賞賛された。

1990年代にヒスパニックの婚姻関係に占める対白人婚の比率が減少したこと自体は事実である。しかしそこから直ちに「社会的距離」の変化を示唆することはできない⁽⁸⁾。なぜなら、ヒスパニックに限らずどんな集団も強い民族内婚の傾向を持っているので、同族が増大して、特に男女比が改善すれば外婚に比べ相対的に内婚が増大するのは必然だからである。このような人種・民族構成の変化を考慮したうえで、対白人婚が減少しているかどうかは、判断の難しい問題である。これについては対数線形モデルによる分析を用いることで対応できるとされており、チャン＝リヒターの一連の分析でも本論でもこの方法で分析をおこなっている⁽⁹⁾。

次にデータ上の問題として、2007年までのチャン＝リヒターの研究では、基本的に1990年と2000年のアメリカ国勢調査のデータの比較から結論を導いていることを指摘しておく。データの性格や分析の簡素化を考慮しての選択だっただろうが、たった2時点のみの比較から長期的趨勢について結論を出すことは困難である。これについては彼らも、

1990年代の意味するものが、それまで数十年間続いてきた婚姻による同化の一時的な人口学的停止なのか、それとも新たな人種の分節化または人種的文化的バルカン化の始まりなのかは不明確である (Qian and Lichter 2007: 90-91)

と留保をつけていた。そして2011年の論文ではこの点を補うべくCPS⁽¹⁰⁾の年次データを1995年から2008年まで14年間のデータを用いて分析をおこなった。しかしその結果、却ってそれまでの主張からは後退した結論が導き出された。それは、

ここで観測された民族間の結婚パターンの変化の大部分は人口構成の変化によって説明されることが分かった。すなわち、移民の増大がヒスパニックの民族アイデンティティを強化して人種的・民族的境界線を書き換えつつあるという代替仮説は、この人口構造説によって否定されたのである。(中略) 少なくともここで我々の用いた14年間で2期に分ける方法では、機会構造の変化が民族間結婚の選好をも変化させたという証拠を見つけることはできなかった (Lichter et. al. 2011: 259)

というものである。ただし、彼らはここで分節的同化論を完全に放棄したのではなく、依然としてそれらしき主張を維持している。例えば、ヒスパニック2世の結婚動向(1世との間で増大すると同時に対3世と対白人で相対的に減少している)を「民族間婚からの後退(“retreat from intermarriage”)(同: 249)とか「前例のない人口学的停滞(unprecedented “demographic pause”)(同: 260)と呼んで同化傾向の逆転仮説を部分的に唱えている(どちらも二重引用符に入れていることから、仮説との意味合いがあるのだろう)。しかし1990-2000年の国勢調査による比較を、この2011年の論文のように1995-2001年と2002-2008年のプールデータの比較で補完するのは難しい。とくに7年間の平均値を2点で比較して傾向を語るというのは無謀といってもよい。たとえ各時期のサンプル数は減少しても、少なくとも3時点を見るのが妥当であったろう。以上の批判を踏まえ、次節ではできるだけ新しいデータを用いてヒスパニックの結婚傾向の推移を観察してゆく。

3. アメリカにおけるヒスパニックの人口動態および民族・世代間婚の推移

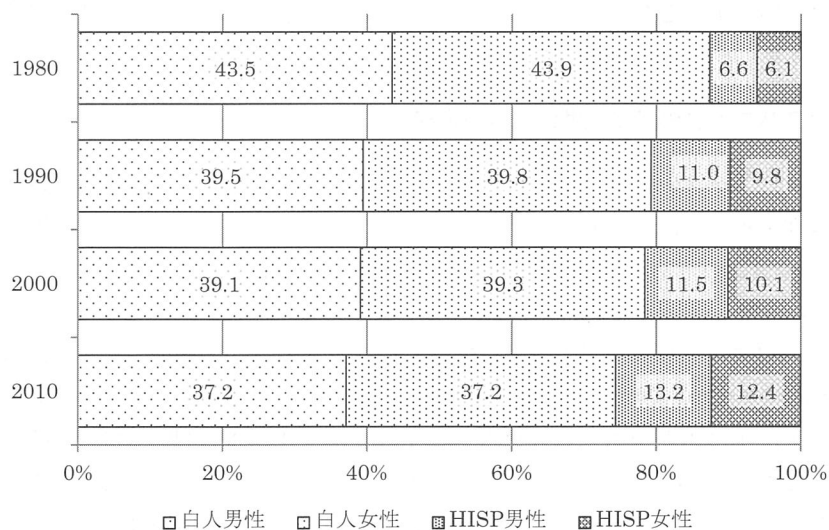
本節ではIPUMS⁽¹¹⁾ から入手した1980年、1990年、2000年の米国国勢調査のサンプル(PUMS⁽¹²⁾)と2001~2011年までのACS⁽¹³⁾のデータを加重集計した推計値を用いる。その際、チャン＝リヒター (Qian and Lichter 2007) にならい、サンプルを20-34歳の男女に限定する。これは国勢調査には結婚の時期を問う質問が無いため、全年齢層を用いると数十年前に結婚した夫婦と最近結婚した夫婦がサンプル中に混在して婚姻パターンの動向を把握することが難しくなるからである。比較的若年者に限定したサンプルを用いれば、直近10年程度の間結婚したものを見出すことができる。この方法は晩婚化などが顕著にあり、特に比較的壮年層で外婚が増加する傾向と重なる場合にはバイアスを生じさせる可能性があるが、一方で年齢層を40歳台まで広げると傾向の把握が困難になってしまう。とはいえヒスパニックにおいては晩婚化は観察されておらず、チャン＝リヒターとの比較検討の目的もあるので、20-34歳の男女で妥当と判断した。以下ではまず、結婚の前提となる民族・世代・そして性別の人口分布について、次に民族・世代間婚についての記述統計を見ることにする。

3-a. ヒスパニックと白人、およびヒスパニック世代間の人口動態

民族外婚の増減それ自体をそのまま民族間の「社会的距離」の指標と見ることはできない。図2は白人とヒスパニックの男女人口比（全年齢層）の推移を示したものである。まず白人・ヒスパニックの相対比を見ると、1980年に白人が87.4%に対してヒスパニックは12.6%と、約7倍の差があったのに対し、2010年には同74.4%に対して25.6%と約3倍にまで縮小した。ヒスパニック人口が相対的に増大するとともに両民族間の接触頻度は増大して、民族外結婚の増大要因となりうる。しかしヒスパニックの男女比が安定的に推移しているため、地理的分布などの条件が改善すればむしろ民族内結婚の増大要因ともなりうる。このような人口構成の変化による、ある意味「自然な」外婚の増減は両民族の親密性である「社会的距離」変化とは区別して考える必要がある。

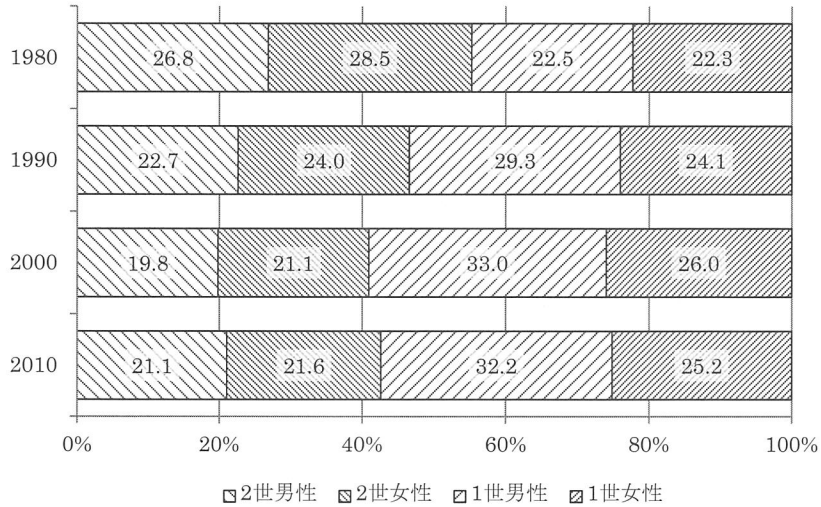
ヒスパニック内部の構成では、男女別・世代別⁽¹⁴⁾の人口動態（若年、未婚・既婚含む）を見た図3に示すように、特に1世において男女比が大きく変化した。1980年には1世の男女比は1対1だったが、1980年代と90年代には1世男性の割合が22.5%から33.0%と10ポイント以上増大し、いっぽうで1世女性の増大は22.3%から26.0%にとどまったため、2000年には男性が女性よりも7ポイント多くなった。このアンバランスは2010年にも継続している。ヒスパニックの世代間比率については、1980年以降の移民流入増を反映して2世（およびそれ以降のアメリカ出生世代—以下同）の相対的減少が見られる。しかし2000年代のうちに傾向はやや逆転し、2010年の統計では2世が増加に転じている。1世増大の停滞については2001年のテロの影響や

図2 白人とヒスパニックの人口推移（20-34歳）



Census PUMS 1980, 1990, 2000, およびACS 2010（加重推計）

図3 ヒスパニックの男女・世代間比（20-34歳）



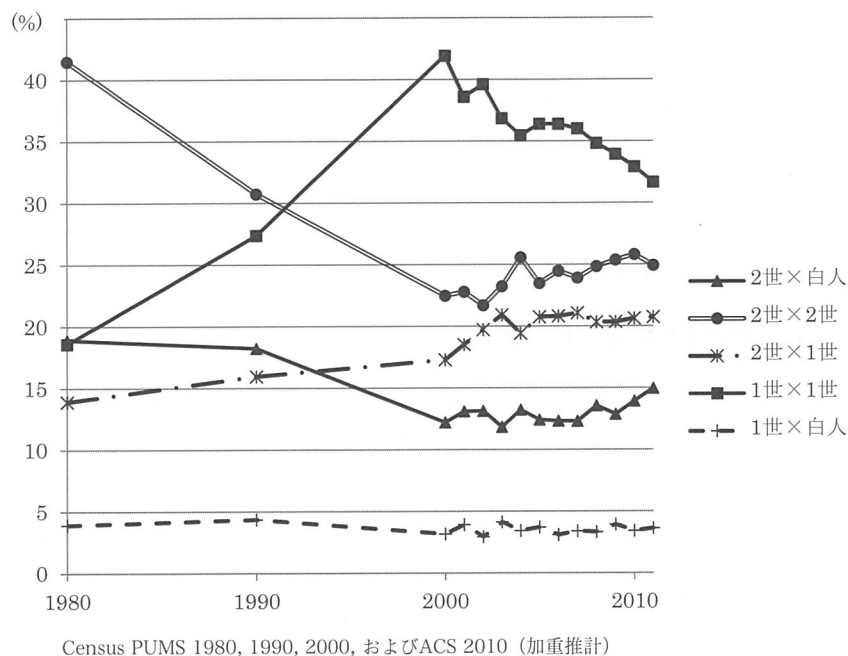
Census PUMS 1980, 1990, 2000, およびACS 2010 (加重推計)

2008年以降の景気後退があり、逆に2世の相対的増加はそれ以前に入国した1世の家族形成が進んだ結果と考えられる。1980年代から2000年までは、1世男性のアンバランスな増加により世代内婚のみでは男性が過剰になるので、2世との世代間婚または白人を中心に民族外婚にむかう圧力が増大したと考えられる。いっぽう2000年代には、1世の増勢が治まった結果、外婚圧力がいったん弱まったと推測される。たとえ同民族でも外国生まれとアメリカ生まれの差異は決して小さくない。1世と2世の若者がどのような選好をもつかによって、世代間婚の様相が変わるであろうし、またその影響で民族間婚の動向も変化するであろう。

3-b. ヒスパニックの民族・世代間婚の推移

以下ではヒスパニックの結婚パターンの推移を5類形に分けて示す。まず既婚の男女についてそれぞれ人種・民族（白人、黒人、ヒスパニック、アジア系、その他）及び世代（1世・2世）の組み合わせによってカップルを区別すると、計100の組合せが成立する。そのなかでヒスパニックを少なくとも1人含む組合せは36あり、そこから男性のサンプルのみを用いることで20に絞られる。更に白人移民、黒人・アジア系・その他の人種とヒスパニックとの結婚は全てを合計しても非常に少ないので、ここでは省略する。結果、ヒスパニック関連の6組のペア（男性と女性の順で、①2世と白人；②2世と2世；③2世と1世；④1世と2世；1世と白人；1世と1世）ができ、③と④を世代間婚として合計して、最終的に5組の類型を作成した。またヒスパニック1世については、アメリカ入国前に既に結婚していて、結婚後に家族で米国入国あるいは定着後に家族を呼び寄せるケースも当然あり、アメリカ入国後にパートナー探しをするのとは状況が大きく異なる。そこでなるべく入国後の結婚事例を選出するために入国時年齢を20

図4 ヒスパニック男性（20-34歳）の結婚パターン



歳未満の者のみをサンプルに算入した。チャン＝リヒターの一連の研究でも同様の定義がなされている。

このように分類した結婚5類型の1980年以降2011年までの推移を示したものが図4である。2000年以降は毎年のデータを使用しているのやや変則的な図になっている。特徴的なのは1世同類婚と2世同類婚、世代間婚と2世白人婚の相対比が、それぞれ相補的に推移していることである（ただし後者については2000年以降は並行して増大している）。1980年から2000年にかけて一世人口が増加するなかで1世同類婚も増大し、相対的に2世の同類婚と対白人婚が減少したと考えられる。他方で1世の男性過剰を反映してか世代間婚が緩やかに増大している。確かに上記③（2世男性と1世女性）と④（1世男性と2世女性）を分けて比較したところ、つねに④が③を上回っていた。

ここで1世同類婚の相対増と2世ヒスパニックの対白人婚の相対減について、ゴードンのな婚姻同化の停止とか、継続的移民文化の再生産による分節同化だと判断するのは早計である。ある婚姻形態が相対的に増大すれば他の形態の相対比が減少するのは当然のことであり、世代内婚の傾向が強い移民1世の割合が1980-90年代に増大したために、2世の外婚が相対的に減少したと見るべきである。既に繰り返して述べてきたように、人口構成の変化によりヒスパニックの平均外婚率が減少したものの、それは必ずしもヒスパニック・白人間の選好度の低下を表すとは言えないのである。

1980年以降の30年間、ヒスパニックが相対的に拡大し続けているにもかかわらず、2000年代

になって1世同類婚は減少に転じ、代わって2世同類婚・世代間婚、2世対白人婚が相対的に増大した。おそらくヒスパニック内の人口構成の動態を反映して、2000年以降に2世対白人の外婚の相対比の減少傾向が逆転したのであろう。同時期に2世同類婚も2世対1世の世代間婚の比率も増大しているのは、1世の相対的拡大の停滞が2世男性の選択肢（同民族の同世代、同民族異世代、民族外のいずれか）に影響したのではなく、たんに1世同類婚の縮小ないし停滞を反映したものに過ぎないと思われる。とはいえ、記述統計で人口構成の動態と人種・民族間および世代間の選好度すなわち「社会的距離」を分離して考えるのは限界があるので、適切な分析手法を用いなければならない。

4. 人口構成の変化を考慮した分析

婚姻パターンから人口構成の変動の影響を考慮して「社会的距離」の変化を捉えるには、対数線形モデルを用いるのが一般的であろう。結婚のクロス表においては、夫と妻それぞれの民族・世代の人口分布状況が周辺度数となる。そしてクロス表の各セルは民族・世代内外婚のそれぞれの組み合わせの発生頻度となる。このセル頻度の自然対数 (log) を被説明変数として、周辺度数等の「要因」の対数を加算することによって、期待度数を推定するのが対数線形モデルである。分析対象となるクロス表は、前述の10×10の表から「その他」の一世・二世を除いて8×8の表を用い、これを1980年、90年、2000年、2010年の4時点において作成した（付表参照）。結婚表の特徴は対角セルにおける同類婚の頻度が多いことと、非対角セルの非同類婚の頻度が対角に対し概して対称に分布することである。ただしマイノリティ女性のほうが外婚しやすい傾向もモデルに組込む⁽¹⁵⁾。以下の分析においてデータ処理にはSASを、対数線形モデルの計算にはℓEM (Vermunt 1997) を用いた。

$$\begin{aligned}
 \text{M1: } \log F_{ijk} &= \lambda + \lambda_i^H + \lambda_j^W + \lambda_k^T + \lambda_{ik}^{HT} + \lambda_{jk}^{WT} && [\text{Base}] \\
 \text{M2: } \log F_{ijk} &= [\text{Base}] + \lambda_{ij}^{HW} * \phi_k^T && [\lambda_{ij}^{HW} = \lambda_{ji}^{HW}], \quad [\lambda_{ji}^{HW} | i = j] \\
 \text{M3: } \log F_{ijk} &= [\text{Base}] + \lambda_{ij}^{HW} (1 + \beta_{ij} X_k) \\
 \text{M4: } \log F_{ijk} &= [\text{Base}] + \lambda_{ij}^{HW} (1 + \beta_{ij} X_k) + \delta_{ij}^F \\
 \text{M5: } \log F_{ijk} &= [\text{Base}] + \lambda_{ij}^{HW} (1 + \beta_{ij} X_k + \gamma_{ij} X_k^2) + \delta_{ij}^F
 \end{aligned}$$

上記のような一連のモデルを推定した。M1をベースモデルとし、M2以降に[Base]として組み込んでいる。H_iは夫の、W_jは妻の民族・世代、T_kは時期の周辺度数を示す。HT、WTはそれら周辺度数の交互作用を意味している。i=1…8、j=1…8、k=1…4である。M2ではHWすなわち夫と妻の民族・世代の交互作用（つまり各セルの期待値）を導入するが、これを全セルについて別々に推定するのではなく、対角部分を参照項として固定するとともに非対角部分を対称とみなす。具体的には図5の左側のマトリックスのように対角をゼロとし、対称位置にある係数が同一になるように指定してゆき、実際には8×8の表なので係数を28個まで対称に指定する。例えばヒスパニック2世の男性と白人2世女性のカップルの推計値と、白人2世男性とヒスパニック

ク2世の女性のカップルの推計値を、他の条件を考慮したうえで一致させている。ただし一致といってもそれぞれの周辺度数は異なるので、最終的な推定値は非対象であり観察値に近くなる。逆にいえば周辺度数によるアンバランスを考慮した上で、対応するカップルには同一係数があてられることになる。

図5 分析に使用したマトリックスの一部

準独立対称 (HW)	女性外婚(F)
0 1 2 3	0 1 2 3
1 0 4 5	0 0 0 0
2 4 0 6	0 0 0 0
3 5 6 0	0 0 0 0

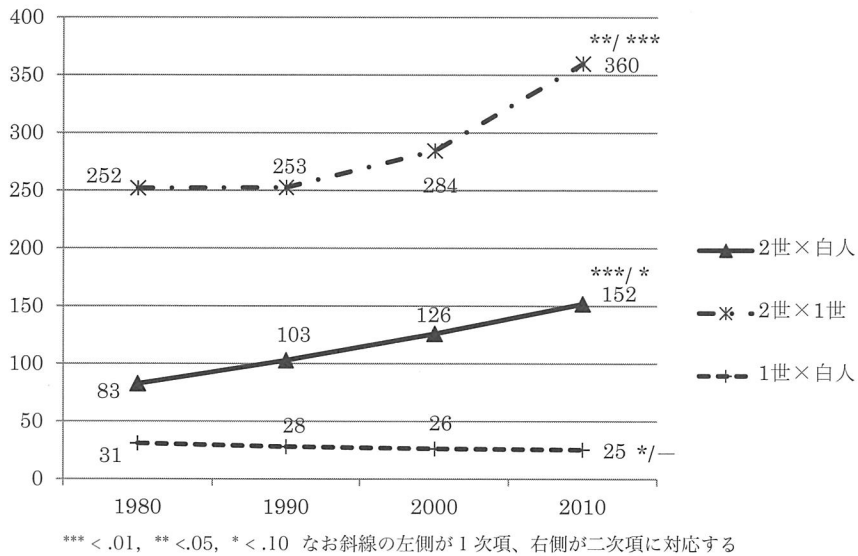
データは4時点あるので、HWのクロス表が4層重なっていると考えればいい。ここにHWの要素すべてに一樣で時系列上は離散的な変化を想定すると ϕ_K^T となる。これは基本的には各年のサンプル総数の変動をコントロールする λ_K^T を越えて、HW指定のセル度数が一樣に変動するとみている。しかしながら、民族・世代の組み合わせによっては度数が増えるセルも減るセルも存在するはずであるから、さらに個別に変動を特定したい。そこでM3のように各セルの変動を線形に想定する。ここで推定される β_{ij} は周辺度数や調査年別のサンプル数の変動の影響を除外した上で、各セルの男女の組み合わせについて拡大傾向にあるか縮小傾向にあるかを示すことが期待される。さらにM4ではマイノリティ女性の対白人外婚の傾向を加味して、もうひと組のマトリックス(図5右側)を追加している。更にM5では、HW各セル度数の変動が2次曲線であることを想定して二乗項を導入している。図4にあったような2000年を境にした逆転現象が周辺度数の変動ではなく各セルの個別の変動に由来するものであれば、つまり各ペアにおける「社会的距離」が非線形的に拡大したのであれば二乗項の係数 γ_{ij} は負の方向で有意になるが、もし距離の接近があったのであれば正に有意となる。

表1 モデル比較

モデル	L ²	df	BIC	AIC
M1	1294504	196	1291699	1294112
M2	4447	165	2086	4117
M3	955	140	-1048	675
M4	609	134	-1308	341
M5	429	106	-1095	217
比較テスト	ΔL^2	Δdf	p	
M3 vs M4	860	18	0.000	
M3 vs M5	1040	46	0.000	
M4 vs M5	180	28	0.000	

上記モデルの計算結果を比較すると表1のようになる。頑健性についてはM4とM5が拮抗しており、比較テストをするとM5がM4よりも有意に優れているが、BICではM4がもっとも頑健となる。これはM4からM5への自由度の消化に対するL²の減少度が逡減していることによると

図6 ヒスパニック男性の外婚の推計値（対1000人）



考えられる。つまり二乗項の効果があるセルとそうでないセルが混在していて、全体的にはM5とM4のどちらを採用してもさほど大きな違いはないといえる。今回はヒスパニックの世代間婚について有意に正の二乗効果がみられたので、M5を採用することとした。

最終モデルのHWについての推定値のみにもとづいた推計値をプロットすると図5のようになる⁽¹⁶⁾。この数値は当該4時点において、周辺度数をコントロールした上で対角の同類婚1000人あたり何人の外婚が見られたかを示しており、数字自体にはさほどの意味はないが「社会的距離」の推移をみるという点では有効である。各線は一次項と二次項からできているので、それぞれの有意確率を*で示してある。人口構成の変動を考慮した上で、ヒスパニックの世代間婚は90年以降に加速度的に増大しており、また2世の対白人（非移民）婚も着実な増大傾向にある。いっぽう1世の対白人（非移民）婚はほぼ横ばい状態にあることが読み取れる。

5. 結論

アメリカにおいては1980年以降の30年間に大幅な人口構成の変動があり、白人に対するヒスパニックの比率は4対1にまで高まった。そのなかで表面的にはヒスパニックの1世同類婚や世代間婚が増大し、対白人婚が減少した。しかしこれら人口構成を要因とする婚姻パターンの変動を除外してみると、ヒスパニックの世代間婚が加速すると同時に2世の対白人（非移民）婚も増大してきたことが明らかになった。ヒスパニック世代間の距離が人口構成から予測される以上に接近したという点ではチャン＝リッターのいう「結婚同化からの後退」という解釈も部分的には支持されるものの、国内出生のヒスパニックと白人との社会的距離は着実に縮小しており、両者が排他的になっているものでないことは強調しておくべきであろう。この結論は女性のサンプルに対する分析でも支持されている。以上の結論はヒスパニックも同化しつつあるという意味

では新同化論を支持するが、ヒスパニック内の各グループの分節的同化を否定するものではない。今後は世代間婚の内部構成をみることで分節的同化論についての示唆もあると期待される。また新同化論にしても、対白人婚を唯一の同化指標と考えるのではなく、教育レベルや職業にも着目してゆくべきである。他にもアジア系との比較など、課題は山積している。

注

- (1) 本研究の実施にあたり大東文化大学経済研究所の2013年度研究プロジェクト支援を得ている。記して感謝する。
- (2) 20世紀アメリカ最大の問題が黒人・白人の境界線であると述べたのは、アメリカ黒人運動の草分け的な知識人であり、全米黒人地位向上協会 (NAACP) の創立者でもあるW.B.E.デュボイスである。リー＝ビーンはデュボイスの有名なこの一節を援用している。
- (3) 中南米を中心とするスペイン語圏からの移民とその後継世代を指す。この分類は自己申告に基づくものであり、すべての人種を内包し、既にスペイン語を話さない新世代も含むこの枠組みが、果たして単一の民族集団として成立するのかどうかは議論の余地がある (Census Bureau 2011)。
- (4) Non-Hispanic White。以下で「白人」と記述する場合、非ヒスパニック系白人を意味する。
- (5) 宗教的に大きな相違のあるユダヤ人についても、従来の「同化」概念が該当するかどうかはともかく、人種的には白人として違和感がなくなっている (Alba 2009)。
- (6) 分節的同化理論 (Segmented assimilation theory) はもともと分節労働市場 (Split labor market) における移民労働者の地位にかんする理論に由来し (Bonacich 1976; Piore 1979)、本文にあるポルテス＝ジョウさらにはルンバウト等の移民2世に関する研究により、移民と次世代マイノリティの多様な統合形態 (Modes of incorporation) を説明した理論である (Portes and Zhou 1993; Zhou 1997; Portes and Rumbaut 2001; Portes et. al. 2009)。
- (7) Intermarriageないしout-marriageの訳語とする。また民族内婚・世代内婚に対してその集団「外」の相手との婚姻 (民族間・世代間の結婚) を指して一般的に「外婚」と呼んでおく。
- (8) 筆者は2010年のPAA (アメリカ人口学会) においてこの点を指摘しており、Qian教授との意見交換も何度かおこなっている (Kawano 2010)。
- (9) 「ログリニアモデル」と表記することもある。Powers and Xie (2008) 参照。実践例としては三輪 (2005) などがある。本論における分析モデルは本文第4節で詳述する。
- (10) Current Population Survey (CPS) は主に雇用統計を作成するためにアメリカ労働統計局が連邦統計局と共同で実施している月例の調査である。このなかでASEC (Annual Social and Economic Supplement) またはMarch Supplement とよばれる調査データはおもに所得にかんする情報を補足するものである。
- (11) Integrated Public Use Microdata Series (Ruggles 2010) の略称。米国国勢調査サンプルを中心に個票データを保存し、研究者等のリクエストに応じて無償で提供するサービスである (ウェブサイト <https://usa.ipums.org/usa/>)。
- (12) Public Use Microdata Sample。サンプルサイズは各年 (1980, 1990, 2000) 5%。
- (13) American Community Survey (ACS) とは、アメリカ連邦統計局により2001年以降毎年実施されている調査である。連邦統計局は2010年以降の国勢調査の個票データを公表せず、ACSで代用することになった。サンプルサイズは試行期間の2001～2004年は0.3%前後、2005年以降は1.0%前後とPUMSよりも小さくなったが、その代表性と継続性は連邦統計局によって確保されている。
- (14) 今回使用したデータには祖父母が移民 (外国出生者) であったかを問う変数がなく、3世を特定することはできない。したがってここでは本人が外国出生であれば1世、アメリカ出生であれば2世以降の世代 (本文では2世と呼ぶ) となる。なお1世についてはアメリカ入国時の年齢が分かるので、若年時入国者を1.5世とし

- て特定することは可能である（本文も参照）。
- (15) 結婚表では既婚者のみが対象となることから、未婚者の人口や結婚率を考慮できていないとの批判があるが、少なくともここで用いられた手法と分析対象に関する限り、結婚表に未婚者数を導入しても結果は大きく変わらなかった。
- (16) 図4の5類型のうち同類婚2類型は参照グループとなるので、図6では残りの3類型を表示している。ヒスパニックに関わらない組合せは省略した。

参考文献

- Alba, Richard. *Blurring the Color Line: The New Chance for a More Integrated America*. Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press (2009).
- Alba, Richard and Victor Nee. *Remaking The American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration*. Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press (2003).
- Bonacich, Edna. “Advanced Capitalism and Black/White Race Relations in the United States: The Split Labor Market Interpretation.” *American Sociological Review* 41: 34-51 (1976).
- Bonilla-Silva, Eduardo. “From Bi-racial to Tri-racial: Towards a New System of Racial Stratification in the USA.” *Ethnic and Racial Studies* 27-6: 931-950 (2004).
- Census Bureau. *Census Briefs C2010BR-02 Overview of Race and Hispanic Origin: 2010*. U.S. Department of Commerce, Economics and Statistics Administration (2011).
- Gordon, Milton. *Assimilation in American life: the Role of Race, Religion, and National Origins*. New York, Oxford University Press (1964).
- 梶田孝道. 「人の移動と国家の制御——出入国管理からネーションフッドの再定義へ」梶田・丹野・樋口編『顔の见えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』第1章. 名古屋大学出版会 (2005).
- 川野幸男. 婚姻によるメキシカン・マイノリティ同化の実態——対数線形モデルによる民族・世代間婚の分析—. 『年報社会学論集』(24) 86-96 (2011).
- Kawano, Yukio. “Unions that Divide: Interracial and Intergenerational Marriages among Mexicans.” Paper Presented at PAA (アメリカ人口学会)、ダラス (2010).
- Lee, Jennifer and Frank D. Bean. *The Diversity Paradox: Immigration and the Color Line in 21st Century America*. New York: Russell Sage Foundation (2010).
- Lichter, Daniel T., J. Brian Brown, Zhenchao Qian, Julie H. Carmalt, “Marital Assimilation Among Hispanics: Evidence of Declining Cultural and Economic Incorporation?” *Social Science Quarterly*, vol. 88-3: 745-765 (2007).
- Lichter, Daniel T., Julie H. Carmalt, and Zhenchao Qian. “Immigration and Intermarriage among Hispanics: Crossing Racial and Generational Boundaries.” *Sociological Forum* 26: 241-64 (2011).
- 三輪哲 「日本における学歴同類婚の趨勢の再検討」『家族形成にかんする実証研究』第6章. SSJDA37 (2007).
- Morgan, Charlie V. “Immigrant Intermarriage.” In Gold, S. J. and S. J. Nawyn, ed. *The International Handbook of Migration Studies*. Routledge (2013).
- 村田勝幸 『『人種化されたネイティブイズム』の史的背景』同著『〈アメリカ人〉の境界とラティノ・エスニシティ——「非合法移民問題」の社会文化史』第1章. 東京大学出版会 (2007) .
- Piore, Michael J. *Birds of Passage: Migrant Labor in Industrial Societies*. Cambridge: Cambridge University Press (1979).
- Portes, Alejandro, Fernández-Kelly, Patricia and Haller, William. “The Adaptation of the Immigrant

- Second Generation in America: A Theoretical Overview and Recent Evidence.” *Journal of Ethnic and Migration Studies*. vol. 35:7 (2009).
- Portes, Alejandro and Min Zhou. “The New Second Generation: Segmented Assimilation and its Variants among Post-1965 Immigrant Youth.” *Annals of the American Academy of Political and Social Sciences*. 530: 74-96 (1993).
- Portes, Alejandro and Rubén G. Rumbaut. *Legacies-The Story of the Immigrant Second Generation*. University of California Press (2001).
- Powers, Daniel A. and Yu Xie. *Statistical Methods for Categorical Data Analysis, Second Edition*. Emerald Group Publishing Ltd. (2008).
- Qian, Zhenchao. “Breaking the Racial Barriers: Variations in Interracial Marriage Between 1980 and 1990.” *Demography*, 34-2: 263-276 (1997).
- Qian, Zhenchao and Daniel T. Lichter. “Social Boundaries and Marital Assimilation: Interpreting Trends in Racial and Ethnic Inter-marriage.” *American Sociological Review*, vol.72: 68-94 (2007).
- Qian, Zhenchao and Daniel T. Lichter. “Measuring Marital Assimilation: Inter-marriage Among Natives and Immigrants.” *Social Science Research*, 30 : 289-312 (2001).
- Qian, Zhenchao, Jennifer Glick, and Christie Baston. “Crossing Racial, Ethnic, and Nativity Boundaries: Ethnic Differences in Marriage and Cohabitation.” *Demography*, 49: 651-675 (2012).
- Ruggles, Steven J., Trent Alexander, Katie Genadek, Ronald Goeken, Matthew B. Schroeder, and Matthew Sobek. *Integrated Public Use Microdata Series: Version 5.0* [Machine-readable database]. Minneapolis: University of Minnesota (2010).
- Song, Miri. “Is Inter-marriage a Good Indicator of Integration?” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, vol. 35-2: 331-348 (2009).
- 鈴木和子. 「移民適応の中範囲理論構築にむけて」奥田道大・松本康編『先端都市社会学の地平』3章. ハーベスト社 (2006).
- Vermunt, J.K. *LEM: A General Program for the Analysis of Categorical Data*. Department of Methodology and Statistics, Tilburg University (1997).
- Xie, Yu and Emily Greenman. “The Social Context of Assimilation: Testing Implications of Segmented Assimilation Theory.” *Social Science Research* 40:965-984 (2011).
- Yancey, George. *Who is White?: Latinos, Asians, and the New Black/Nonblack Divide*. Boulder, CO: Lynne Rienner Publishers (2003).
- Zhou, Min. “Segmented Assimilation: Issues, Controversies, and Recent Research on the New Second Generation.” *International Migration Review* 31 (4): 825-858 (1997).

付表6 4人種・民族、2世代による結婚表(1980-2010)

		米国出生				国外出生			
1980		白人	黒人	ヒスパニック	アジア系	白人	黒人	ヒスパニック	アジア系
米国 出生	白人	524927	377	6411	616	8040	23	1773	1300
	黒人	1597	45406	377	29	157	474	158	133
	ヒスパニック	6914	189	14962	53	218	9	2474	62
	アジア系	404	6	55	824	16	0	7	174
国外 出生	白人	6013	12	154	11	1726	2	102	32
	黒人	25	251	8	0	10	308	15	1
	ヒスパニック	1409	70	2397	12	110	11	6453	19
	アジア系	120	2	10	73	8	0	7	341
1990									
米国 出生	白人	435695	585	7485	677	5391	63	2126	1092
	黒人	1751	27967	436	12	139	422	176	56
	ヒスパニック	7237	221	12944	62	152	21	2866	53
	アジア系	476	8	73	546	19	1	12	179
国外 出生	白人	3471	17	129	17	1318	5	100	19
	黒人	49	316	14	1	8	414	22	5
	ヒスパニック	1606	87	3288	12	98	14	10615	18
	アジア系	135	1	13	68	5	1	11	750
2000									
米国 出生	白人	300612	886	7211	573	3949	96	2029	971
	黒人	2876	22369	819	26	162	454	221	59
	ヒスパニック	7042	302	13488	69	192	31	4511	59
	アジア系	378	19	48	287	10	1	10	212
国外 出生	白人	2210	22	147	16	1772	4	162	26
	黒人	113	379	53	1	20	750	42	8
	ヒスパニック	1738	88	5541	22	207	27	24092	24
	アジア系	196	4	19	87	17	1	27	1560
2010									
米国 出生	白人	46367	205	1601	118	684	28	387	212
	黒人	517	2235	174	6	21	99	40	13
	ヒスパニック	1604	60	2539	14	56	6	944	13
	アジア系	82	1	9	83	4	0	5	82
国外 出生	白人	304	6	32	3	383	1	25	2
	黒人	34	66	14	0	7	129	7	2
	ヒスパニック	341	11	1064	2	26	5	2785	5
	アジア系	44	1	1	43	4	1	2	238

Census PUMS 1980, 1990, 2000, およびACS 2010